

整理作業でみつけた「なるほど」な情報を、一早くご紹介！

# この資料「ここがみどころ、ここがツボ!!」-整理作業の最前線から「蔵出し」最新情報/File.006-

博物館には「収蔵資料整理」とよばれる、資料を世に出すにあたり基礎となり不可欠な作業（点検・ナンバリング・収納・補修など）があります。この作業では、規模の大小はあれ、日々「新（あるいは再）発見」と「感動」と「謎や問いかけ」があり興味が尽きない一方、コツコツと根気強くやるしかない地味で辛く大変な作業です。

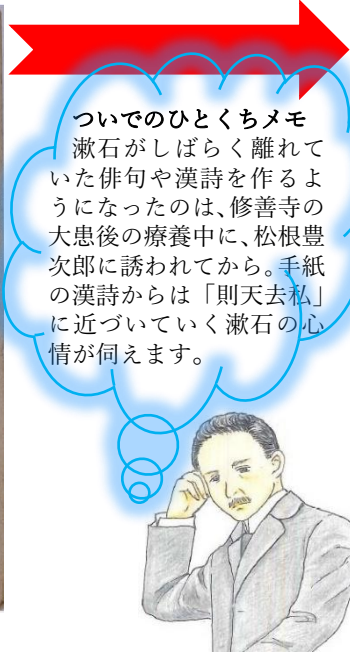
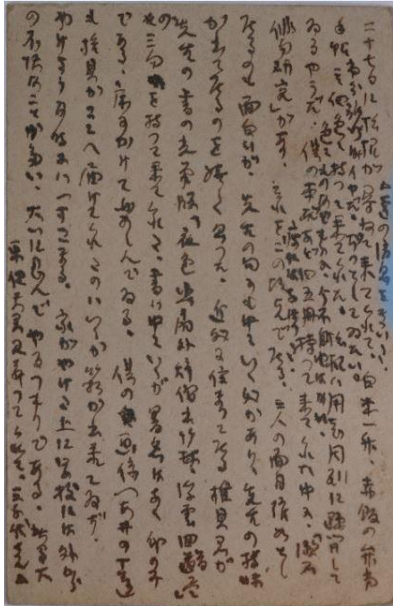
ここでは、そんな整理作業の過程で得られた資料にまつわる「なるほど」で「ほほう」な情報をご紹介して参りますので、皆さんも情報を通じてこの大事な作業の「協働者」になって頂けると幸いです。

というわけで、今回皆さんにご紹介したい新（再）発見資料はコレです！

■資料名 : 安倍能成宛小宮宛書簡（ハガキ）東京目黒区より（小宮豊隆資料〔追加分〕から）

■資料のひとことPR: 第2次世界大戦（終戦間際）の中、門下生たちの心の中に漱石の俳句があったことが伺えます。

■資料写真 : 該当ハガキ裏面（通信欄）



ついでのひとつちメモ  
漱石がしばらく離れていた俳句や漢詩を作るようになったのは、修善寺の大患後の療養中に、松根豊次郎に誘われてから。手紙の漢詩からは「則天去私」に近づいていく漱石の心情が伺えます。

二十七日に松根が尋ねて来てくれて、白米一升、赤飯の弁当手帖其他色々持って来てくれた。松根は用意周到に疎開してあるやうだ。僕の本だなど四五冊持って来てくれた中に、「漱石俳句研究」があり、それをこの頃よんで居る。三人の面目躍如とし居るのも面白いが、先生の句にも中々い、句があり、先生の持味が出て居るのを嬉しく思った。近処に住まって居る椎貝君が先生の書の写真版「夜色幽扉外 辞僧出竹林、浮雲回首尽」（明月自天心と続く）の三句を持って来てくれた。書ハ中々い、が署名はなく印のみである。床にかけて楽しんで居る。（後略）

■資料データ File

- ・形状/材質/量量 : ハガキ（旧通信省発行官製はがき・弐銭/三銭切手/中厚紙/タテ 14cm\*ヨコ 9cm）
- ・制作年代/時代背景 : 昭和 20 年（1945）5 月 1 日/昭和天皇、戦争終結の詔書を放送（玉音放送・8 月 15 日）
- ・注目ポイント : 戦禍で世界中が不安な中、門下たちの心には「先生（漱石）」の句がそっと寄り添っていた

▲通信欄翻刻 ◀イラスト・担当者

■資料メモ

昭和 20（1945）年 4 月 27 日、第 2 次世界大戦終戦間近のこの日、安倍能成のもとへ松根豊次郎が疎開先から食料や本など物資の供給に訪れました。日々刻々と戦況が悪化する中、安倍の自宅は 4 月 13 日夜の空襲により焼け出されており、家族も信州へ疎開していました。しかし、安倍自身は「一高の在る限りはふみとどまるつもりだ」と一高構内に避難しながら、東京に留まり続けていたのです。度重なる空襲により東京の半分が焼け野原となる過酷な状況下、松根の運んできた本の中には「漱石俳句研究」（小宮豊隆・松根豊次郎・寺田寅彦の監修。漱石の俳句について語り合う）も含まれていました。

ハガキからは安倍が戦禍の中にありながらも漱石の俳句を味わい、書を床にかけて楽しみ、漱石の言葉に心癒されていたことが伺えます。

■整理担当者のつばやき

戦中・戦後の辛く厳しい生活の中、漱石先生の残した俳句や漢詩は安倍さんや小宮さんら門下生の癒しになっていたんですね。「文化の力」は逆境下でこそ発揮される！

注) 1. 本文作成にあたっては、主に以下の資料を参考とさせていただきます。

- ・「先生と僕 夏目漱石を囲む人々 青春篇・作家編」香日ゆら
- ・新宿区立漱石山房記念館開館記念 特別展 「漱石と子規」-松山・東京 友情の足跡- 新宿区立新宿歴史博物館

2. 本文の情報は令和 4 年 5 月現在のものです。その後の究明や新資料の発見により見解が改められることもありますのでご留意ください。

3. 本書に掲載の写真や文章を無断で転載することは禁じられています。